

担当職員の思いから始まったワークショップで  
自由と心地よさに包まれる空間を創造

## コミュニティ・アーツ・ワークショップ

富山市芸術文化ホール(オーバード・ホール)(公益財団法人富山市民文化事業団)

山本 倫子

公益財団法人富山市民文化事業団 総務企画課 企画第2係長

すべての方を対象に、ダンスを通じて触れ合い、いつもと違う空間や時間を共有する場、芸術文化と人がゆるやかにつながる場をつくることを目的に、ダンスのワークショップを実施。障がいのある方とご家族などを対象とした「こども部」、「おとな部」のほか、このワークショップに興味のある方まで対象を広げたクラス等も実施。さらに令和5年度は新しくできた中ホールの広いステージ上で皆で踊るワークショップも行っている。また、支援学校等へのアウトリーチも行い、劇場に来られない方にもアートに触れ合う場を提供している。いずれの事業も担当者が自発的に企画し、障がいのある方への取組について経験のない状態から始め、取組に対する思いを大切に進めている。

### ●事業を始めたきっかけ

平成21年3月、障がいの有無を越えた舞台の創造に取り組むイギリスのストップギャップ・ダンス・カンパニーの公演に合わせ、総合支援学校へアウトリーチを行った際、「なんて豊かな時間なのだろう、芸術文化にはもっと可能性がある」と感じ、これまで担当してきた芸術性の高い事業や市民参加型の感動的な事業とも異なる印象を受け、心に残った。その後、平成27年に就任した芸術監督に「本当にやりたいことをやれ」と言われた際、福祉的事業をしたいと強く思い、令和元年から事業の方向性や講師の検討に着手。パーキンソン病の方々を含めた市民のためのダンス活動などの取組をしているアーティスト、なかむらくるみさんのワークショップに参加。その姿勢に共感し、なかむらくる氏に打診を行い令和3年から実施に至った。

### ●事業の目的

障がいのある、なしに関わらずさまざまな方にアートを楽しんでもらうこと。芸術文化と人がゆるやかにつながること。地域コミュニティと劇場がゆるやかにつながること。劇場やアートのもつ力を信じ、富山の人たちのよりよい未来とコミュニティづくりのために活動すること。

### ●事業実施まで

- ・施設全体としてアクセシビリティ研修や鑑賞サポート等があまり進んでいない中、本事業を実施することに躊躇があった。また、障がいのある方と接した経験もない者が行ってよいのかという不安もあり、ユニバーサルマナー講習や手話講座にも通ったが、「まずはやるしかない」と腹をくくり、「継続してやろうという思いが大切」だと考え、実現につなげた。
- ・事業の進め方については、隣の石川県内の福祉施設などで継続的にダンス教室を行っている、なかむらくるみさんというパートナーを見つけられたことが力となった。
- ・手法については、身体を動かすこと(ダンス)であれば些細な動きでも参加でき、言葉に頼らず身体でコミュニケーションをとることができるため、障がいのある方や国籍の異なる方々などでも対応しやすいと考え、ダンスを主軸とすることにした。さまざまなコミュニティとつながる芸術文化事業でありたい、将来的には他の芸術ジャンルも含めて展開していければという思いを込め、ワークショップの名称を「コミュニティ・アーツ」としている。

## ●実施内容

### 【令和5年度例】

#### ・ワークショップ：

「こども部」：5歳以上で、何らかの障がいのある児童・生徒、そのご家族・ご友人が対象

「おとな部」：18歳以上で、何らかの障がいのある方、そのご家族・ご友人、このワークショップに興味のある方が対象

「ステージのうえでスペシャル」：5歳以上の方ならどなたでも

#### ・アウトリーチ：

富山県立しらとり支援学校：知的障がいのある児童・生徒さんと教諭の皆さん（高等部対象/小学部5年生対象/小学部6年生対象）

## ●事業の工夫

・参加しやすさと安全面を考えて分けた「おとな部」と「こども部」のほか、聴覚や身体に障がいのある方など特性に合わせたクラスや、どなたでも参加歓迎のクラスを設け、幅広い方に興味を持ってもらえるような場づくりを模索している。

・自分がおどっているところを見られるのは恥ずかしい方もいるし、皆でその時間に集中してワークショップをつくりたいという思いから、原則見学はご遠慮いただき、付き添いの方もスタッフも一緒におどることを大切にしている。

・参加者が走り回って大声を出しても、皆がにこにこして安心と安全を感じられるような温かく穏やかな場となることを意識し、「こども部」では、最後に座談会の時間をとり、体験や思いも共有するようにしている。

・生演奏はこだわりの一つ。音に合わせておどるのではなく、音楽家が皆の動きに寄り添うように演奏し、参加者のアイデアからその場で音楽が生まれていく。また、言葉での説明をなるべく少なくし、自由な創造の場づくりを意識している。

・チラシは毎年あえて同じ雰囲気・キャラクターのデザインとし、定例事業として認識できるようにしている。事業内容がよくわからないという意見をいただき、参加してみたい方、興味をもっている方が安心できるように、ワークショップの様子の一部や、講師・参加アーティストからのメッセージの動画を作成し公開している。

・富山大学の手話サークルや支援教育を学んでいる学生に声をかけ、このような取組に興味のある若い世代に参加してもらうことで、場が明るくなる。この経験を、何かの形で未来につなげてほしいと願っている。



「おとな部」(2023年9月)



中ホール開館記念「ステージのうえでスペシャル」(2023年9月)



同じトーンでそろえたチラシ(3年分)

## ● 事業担当者の感想

- ・ワークショップではおどらず、隅に座っている方もいる。しかし、いつもと違う雰囲気の中、音楽に身体をゆだねていることだけでも、アートに触れる機会となっていると思う。
- ・決まった曲や振付に合わせるのではなく、思いのままに身体を動かすことで、その場にいる皆の身体、心、音楽、空間、それぞれが影響し合い、感じ合う時間が生まれていると思う。
- ・実施して初めて気づいたこともある。例えば、未就学児の保護者が非常に積極的だとわかり、参加年齢を下げて「5歳から」とした。そのようにニーズを探りながら、少しずつ内容や対象を変えて取り組んでいる。
- ・当初は障がいのある方とどう触れ合ってよいのかわからず、傷つけないかという不安もあったが、一緒におどると不安は取り去られ、共に触れ合う時間をもてばよいのだと思えた。多文化共生が謳われる今、なぜ「障がいのある方」と対象に打ち出すのかと質問されたことがある。しかし、そのように言葉にすることで、その方々に情報が届き、参加しやすくなる方がいるため、あえてメッセージとして打ち出している。いずれ不登校の方や他国籍の方々など多様なの方々にも参加してもらえるようになるとういと思う。このような場での共有、共感からよりよい世の中につながっていくように思う。
- ・さまざまなアプローチを考え始めるとキリがないが、継続が第一なので、今できることに丁寧に取り組んでいきたい。

## ● 施設の変化

ワークショップもアウトリーチも音響スタッフと持ち込み機材とともに「チーム・オーバード」で行っている。職員が所属を超えて協力し、障がいのある方と触れ合う機会をもつことにより、少しずつ施設職員の意識の変化につながっていると思う。また、若手職員の意識が外（地域、コミュニティ）にも向かうよう、同行してもらっている。劇場の中で完結していればよいわけではないことを共に体験できればと思っている。

最初は肩に力が入っていたが、毎回、障がいのある方の豊かな発想に刺激を受け、今はありのままに楽しい場になっていると感じている。続けるうちに自分や他のスタッフの視野も広がってきている。また、当館の他の（特に「障がい者対象」と謳っていない）事業にも障がいのある方の参加者が出てきた。我々なりにさまざまな事業に参加していただけるよう対応を重ねていくことが、施設全体の変化にもつながっていくと考えている。

## ● 事業の課題

- ・障がいのある人は、学校卒業後には多様な経験をする機会が減ってしまう。この事業についても、「こども部」は保護者が申し込んで参加してもらえるが、「おとな部」は自身や高齢の親が申し込むのが難しい側面があり、参加してもらえないうままでがまず難しい。参加者に「この事業に参加するには『知ること』『申し込むこと』『当日足を運ぶこと』の3つのバリアがある」と言われたが、それらの障壁を下げるために告知方法も考えていきたい。音声でのご案内など効果的な方法も検討したい。加えて、劇場にとって今後どのような展開をしていくべきかを考える必要もある。成熟させる部分と、毎年少しずつ挑戦をしていく部分のバランスをとりながら、多くの方にこの事業の楽しさを体験してもらいたいと思っている。
- ・アウトリーチは施設で行っているワークショップの告知の意味と、多くの方への体験の場の提供の意味あいがあるが、我々がさまざまな場で障がいのある方に対して学ばせていただいているという側面も大きい。また、支援学校では全学年に対しての実施を希望されるケースもあるが、学年ごとに分ける必要や授業時間との調整、講師陣への負担の面などから対応が難しいことも課題と考えている。

## ●今後の展開（方向性・希望など）

ワークショップに足を運ぶことができない方も多いため、引き続きワークショップとアウトリーチの両面で進めていきたい。これまでのワークショップでは、視覚に障がいのある方に対して安全を守るサポート準備がまだできていないと考え、告知を積極的に行ってこなかった。来年度は、視覚に障がいのある方のもとへまずはアウトリーチに行き、ワークショップの可能性を探り、一緒に学ばせていただいきたいと考えている。それを踏まえて、今後チャレンジしていきたい。また、富山大学の学園祭でのワークショップや、同大の支援教育を学ぶ学生向けアウトリーチの話なども出てきており、いろいろな形でこの事業の意義を地域に広めていきたい。



記念すべき第1回目「こども部」  
(2021年10月)



「おどるって、とってもノンバーバル！」  
(2022年10月)



「富山聴覚総合支援学校」でのアウトリーチの様子  
(2022年11月)

## 【「コミュニティ・アーツ・ワークショップ」事業データ】

実施回数	令和3年度：「こども部」1回、「おどるって、とってもノンバーバル！」1回 令和4年度：「こども部」2回、「おとな部」1回、「からだ、おと、おどる！」1回、「おどるって、とってもノンバーバル！」2回 令和5年度：「こども部」2回、「おとな部」1回、「ステージのうえでスペシャル」2回
参加者	定員は各回15名～20名ほど
参加料	ワークショップ：500円（障がいのある方の付き添いの方1名は無料）
広報	富山市広報誌への情報掲載、富山市芸術文化ホールのホームページ及び情報誌への情報掲載のほか劇場会員への案内、富山県内支援学校、富山市内放課後デイサービス、富山市の小中学校の支援学級、県内文化施設、富山県発達障害者支援センター、日本ダウン症協会富山支部、富山県自閉症協会、一般社団法人富山県手をつなぐ育成会等の関連団体にチラシ送付または情報提供
他機関との連携	北日本新聞社、富山大学水内研究室（令和3年度）、富山大学手話サークル

### 富山市芸術文化ホール（オーバード・ホール）

所在地：〒930-0858 富山県富山市牛島町9-28（大ホール）、9-17（中ホール）  
TEL：076-445-5620

設置者：富山市

開館：1996年

管理者：公益財団法人富山市民文化事業団

規模：大ホール（2,196席）／中ホール（652席）

施設の特徴：三面半舞台を有する大ホールに加え、令和5年7月に可動式客席により様々なステージ形態を可能とする中ホールが開館

ホームページ：<https://www.aubade.or.jp/>



オーバード・ホール外観

※写真はすべて富山市芸術文化ホール提供